

# 保育内容「環境」における 地域との関わりについての一考察 —地域の環境素材を活かした取り組み—

山路 千 華<sup>1</sup>

## 1. はじめに

6月15日は栃木県県民の日である。明治4年（1871年）に廃藩置県が行われ、県の名称が与えられたことに由来して1960年代以降、各県で県民の日を定める条例等に基づき制定されている。栃木県は1873年6月15日、旧栃木県と宇都宮県が合併され、ほぼ現在の栃木県の形が誕生したことに由来し、1985年に制定されている<sup>1</sup>。

2018年のこの日、「キスできる餃子」<sup>2</sup>という映画が全国ロードショーに先駆けて、栃木県内で先行配信された。この映画は、「映画で地方創生」をライフワークの一つとする秦建日古が脚本・監督し、宇都宮餃子をキーワードに据えた映画である。撮影も主に宇都宮市内で行われ、劇中にも登場する「協同組合宇都宮餃子会」の全面協力のもと、加盟する多くの餃子店や餃子が映し出される。同じ餃子でも、店によって形状も味（映画を見る限りでは味や香りは確かめようもないが）も異なり、それぞれの店のオリジナリティ溢れる餃子があることを前提として総称し「宇都宮餃子」ということらしい。劇中では足立梨花演じる子持ちバツイチとなった陽子、実家で父が営む餃子屋に戻り、閉店となっていた餃子屋を再開しようとするところから物語が動き始める。店の特色ある餃子を作り宇都宮餃子

---

<sup>1</sup> 白鷗大学教育学部  
e-mail : [yamaji@fc.hakuoh.ac.jp](mailto:yamaji@fc.hakuoh.ac.jp)

会への再加盟を目指しながら成長していく主人公が描き出され、タイトルの通り、デートには不向きと言われる餃子を「キスできる餃子」にするべく奮闘する主人公は、味もいまいちパンチのないその餃子を“賢い餃子”であるとアピールする。一方で、長年、餃子作りを生業にしてきた父親からは「お前らしくもない“守りの餃子”」であり、ちっとも食べたいと思わないと酷評される。結局、愛する人のために猪突猛進に馬鹿になって（賢くなく）作られるニラやニンニクたっぷりの主人公らしい“攻めの餃子”は、キスができるのだろうか？というところが、この映画の落としどころとなる。宇都宮の特産品ともいえる数々の餃子が生き生きと描かれた非常に楽しい、お腹の空く映画であった。

宇都宮が餃子の街になったのは、戦後、満州から帰国した兵士が現地で食されていた餃子を作り広めたということだ<sup>3</sup>。また、餃子の具には欠かせないニラの生産量も全国1～2位を争うそうである。ニラについては鹿沼市を発祥にした「ニラそば」も郷土料理として挙げられる。そのように郷土料理というのは、その土地の生産物や食文化に支えられ地域に定着している。食文化をはじめ地域の文化を支えるというのは、そういうことではないだろうか。

さて、政府が「地方創生」という言葉を掲げて久しい。平成26年12月27日に「まち・ひと・しごと創生長期ビジョン」「まち・ひと・しごと創生総合戦略」が閣議決定され、各年の基本方針が決定、改訂されながら現在に至っている。人口減少・超高齢化という現在の日本が直面している課題に対し、各地域がそれぞれの特徴を活かした自律的で持続的な社会を創生することを目指し推進されている政策<sup>4</sup>である。

本稿では、地方創生の大きな目標の一つにも掲げられている子育て支援の課題についてまとめていく。今、日本の保育は多くの集団保育施設等を中心に、地域の子育て支援の拠点施設としての働きを求められている。地域の環境素材を活かした取り組みをいくつか取り上げながら「保育」と「地域」について考察していく。

## 2. 地域と保育

### 2-1. 生涯遊びプロジェクトの継続研究

地域と保育を考えていく上で、まず、金田利子を中心とした「生涯遊びプロジェクト」での継続研究について紹介したい。本研究会の発足は、白梅学園大学として文部科学省私立大学戦略的研究基盤形成支援事業（2009年度より2013年度まで）の研究助成を得て「遊びと学びのコラボレーションによる地域交流活性化システムづくりに関する研究－大学附属幼稚園を拠点として－」というテーマの研究プロジェクトから端を発する。このプロジェクトは5つの小プロジェクトからなり、筆者らが所属するのは「生涯遊びプロジェクト」である。そのプロジェクトでの研究を基に、5年経過後一旦終了し、その後、自主的に継続してきているものである。所属メンバーは主に白梅学園大学・短期大学の所属教員で、主研究員の金田も筆者も2009年の研究プロジェクト発足当時は白梅学園大学・短期大学の所属であった。本グループではこれまでに日本保育学会において以下の通り関連の発表を行ってきている。

- ① 第65回大会（2012年）口頭発表（筆頭発表者：金田利子 他4名）  
「幼児期の保育体験の生涯発達における遊び心の形成に及ぼす効果」
- ② 大学65回大会（2012年）ポスター発表（筆頭発表者：小松歩 他3名）  
「大学を拠点とした遊びWSの効果－地域における遊び心の伝播－」
- ③ 第67回大会（2014年）口頭発表（筆頭発表者：金田利子 他5名）  
「幼児期の保育体験の生涯発達における遊び心の形成に及ぼす効果②  
－その後への影響要因、久保田浩の三層構造を続けてきたS大学附属幼稚園における保育体験の分析－」
- ④ 第67回大会（2014年）口頭発表（筆頭発表者：小松歩 他5名）  
「幼児期の保育体験の生涯発達における遊び心の形成に及ぼす効果③  
－S大学附属幼稚園卒園児親子へのアンケートから－」
- ⑤ 第67回大会（2014年）ポスター発表（筆頭発表者：山路千華 他3名）  
「大学を拠点とした遊びWSの効果－大人の遊び心への影響－」

- ⑥ 第70回大会（2017年）口頭発表（筆頭発表者：金田利子 他3名）  
「遊びによる子どもの育つ地域環境作りⅠ－大人の遊びの研究序説－」
- ⑦ 第70回大会（2017年）口頭発表（筆頭発表者：山路千華 他3名）  
「遊びによる子どもの育つ地域環境作りⅡ  
子育て支援関係者の遊び観に関する調査研究考」
- ⑧ 第71回大会（2018年）口頭発表（筆頭発表者：小松歩 他2名）  
「遊びによる子どもの育つ地域環境作りⅢ  
子育て支援関係者・保育者の遊び観に関する調査研究から」
- ⑨ 第71回大会（2018年）口頭発表（筆頭発表者：金田利子 他3名）  
「遊びによる子どもの育つ地域環境作りⅣ  
－続・「大人の遊び研究」の視点から－」

上の④以降の発表については、より地域に密着した研究となっている。白梅学園大学・短期大学が在する地域の「絆づくり」「住みやすい地域づくり」「顔の見えるネットワークづくり」「大学が地域の人々と共に歩む場づくり」を目指し大学が中心となり地域作りを推進するために2012年3月に結成された「白梅学園大学・短期大学 小平西地区地域ネットワーク（以下 西ネット）」という組織の地域の子育て支援のリーダーを担う大人のワークショップ参加状況や意識調査等を中心に「地域の繋がりを再構築する“遊び心”」について研究を進めている。研究グループの一環したテーマは、「生涯遊び心の形成による内面的地域活性化に関する研究」である。「遊び心」とは、子ども時代ほとんどすべての子どもが持っていた「子ども心」そのものであり、大人が遊び心を持っていれば、子どもが大人に理解され、双方の交流が可能になる。街中がこうした遊び心で満たされたとき、子どもも育ち易くなるのではないかと想定することができる。⑤以降の研究では「遊びは人間にとって大切な動機であり、子ども期だけでなく生涯遊び心を持続けることで、人生が豊かになるのではないか」との仮説から、大人も子どもも生きにくくなっている現代において、子どもの心を大人に回復させ、子育てや生活を「おもしろがる」という「遊び心」で

地域の繋がりを再構築する試みについて考察している。

## 2-2. 遊びによる子どもの育つ地域環境作りⅢ（小松ら、2017）

### <研究の概要と方法>

研究発表⑦「遊びによる子どもの育つ地域環境作りⅢー子育て支援関係者・保育者の遊び観に関する調査研究から」は、これまでも行ってきた意識調査を、子育て支援についてより専門性を持つ保育者を対象として行っている。筆者が主になり調査し、小山市内の私立保育所に勤務する保育士183名（23園）に、研究⑥と同じ質問紙を用い任意に回答してもらった。155名の回答を回収することができ、回収率84.7%であった。回答者の年齢内訳は、20代87名、30代33名、40代23名、50代6名、60代1名、不明5名である。また、後日、小山市私立保育園協議会会長（S保育園園長）に質問紙の集計結果の報告と対談<sup>5</sup>を行ったうえ、1）遊びの本質の理解（遊び観）2）社会的常識に馴染まないように見える遊び場面に遭遇したときの対応、の2つの設問に対する回答を中心に考察した。

### <結果と考察>

#### 1）遊びの本質の理解（遊び観）についての調査

遊びの本質とは何かを「ア 生活そのもの」「イ 社会性、知能、運動能力などを発達させることをねらうもの」「ウ おもしろさを追求する中で自己実現を図る自主的な活動」「エ 乳幼児の欲求を解放するもの」の4つの選択肢から選ぶものである。全体的には、「ア 生活そのもの」の選択者が多かったが、2年目以降、経験年数を増すにつれ減少する。「イ 社会性などを発達させることをねらうもの」を選択したのは20%程度である。「ウ おもしろさを追求する中で自己実現を図る自主的な活動」は経験年数とともに割合が増え、12年以上群ではアとウは僅差となる。（図1）

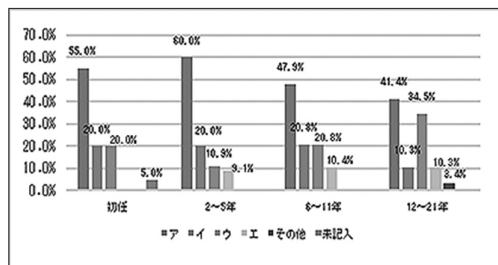


図 1 保育経験年数別遊び観の違い

## 2) 社会的常識に馴染まないように見える遊び場面に遭遇したときの対応についての調査

社会的常識に馴染まないように見える遊び場面の事例は次のようなものである。

Q：次のような場面に遭遇した時、あなたはどのような対応をしますか（よくしがちな対応）？また、本当ならどのような対応をしたいですか（本当はこうしたい対応）？

ア～オでお答えください。

【家の玄関に家族みんなの履物がばらばらにちらばっていました。ふと見ると、幼児（3，4歳）が靴やサンダルを玄関の床の上などに並べ家族の顔を描き始めました】

ア：何してるの汚い、きちんと並べて手を洗ってらっしゃい

イ：おもしろいと思って見守る、声をかける、一緒にする

ウ：片づけを促す

エ：そんなことをすると、もう新しいクツは買わないよ

オ：その他

よくしがちな対応は、どの群もイの割合が高いが、2～5年群はイとウに差がない。本当はこうしたい対応でも、やはりどの群においてもイの割合は高いが、初任者群、12年以上群ではその割合が減り（初任群：62→45%、12年～群：53→43%）、ウやその他（自由記述）の割合が増える。初任群は、どちらの対応もイかウがほとんどであるが、他の群では、アや

エの対応をする者もいる。(図2、図3)

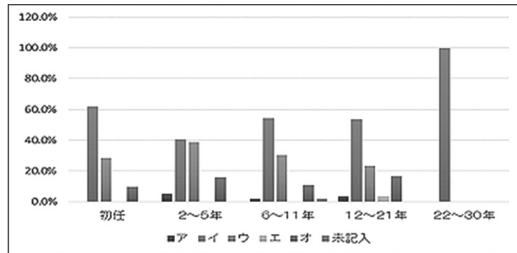


図2 よくしがちな対応（経験年数別）

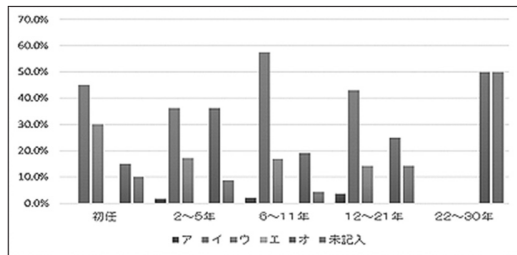


図3 本当はこうしたい対応（経験年数別）

### <全体の考察>

保育学会の発表においては更に経験年数別に分析し、保育者の子ども時代の遊び環境による区分との比較も行っている<sup>6・7</sup>。小松の分析によれば、実年齢と経験年数との関係は明確でないが、短大・大学卒業後の年齢として考えると、どの群の保育者も、子ども時代の遊び環境は決して良いとは言えないものの、育った地域の特性は影響している可能性があるという。更に比較検討を加え、また、意識調査には地域の公園の使用状況や公園利用の考え方等についても調査していることから、更に、保育者と地域の関係について研究を深めていくことが今後の課題といえる。

いずれにしても、小山市の保育士は、前年度の研究発表で対象にした地域のリーダーに比べ、より遊び心を持っていると考えられた。一方、時間や余裕の有無で現実と理想の対応に差が出ることもわかった。園長先生との話からは更に、保護者が保育士を見る目が厳しくなっている現状に

言及され、子育て支援の機会などを活用し「保護者の遊び心」を育てることも必要であるとの指摘がなされた。保護者や同僚保育士、管理職、働く環境すべてで「遊び心」を育てる意識がもてると、地域全体にも遊び心が満たされる環境が見いだせるのではないだろうか。

### 2-3. 保育におけるチーム学校の考え方

平成27年12月21日に中央教育審議会から『チームとしての学校の在り方と今後の改善方策について』の答申<sup>8</sup>が出された。この答申の中で、「チームとしての学校」を実現するための3つの視点として、①専門性に基づくチーム体制の構築（チーム体制の構築）②学校のマネジメント機能の強化（優秀な管理職の確保）③教職員一人一人が力を発揮できる環境の整備（人事育成の充実）が挙げられている。チーム学校の必要性として、生徒指導や特別支援教育等の充実が図られることを期待し、学校種や学校の規模による違いを鑑み、それぞれの学校や教員が、心理や福祉等の専門家や専門機関と連携・分担する体制を整備するよう明記している。ここで使用される「連携・分担」等の文言について、答申上の意味の使用の注釈が添えられている<sup>9</sup>。“本答申では、「連携・分担」と「連携・協働」について、基本的に、以下のような意味で用いている。・「連携・分担」は、校長の指揮監督の下、権限や責任が分配されている教職員や専門スタッフとの間の関係など、学校内の職員間の関係に用いる。・「連携・協働」は、学校と家庭や地域との間の関係や、学校と警察、消防、保健所、児童相談所等の関係機関との間の関係など、学校と学校から独立した組織や機関との関係に用いる。・「連携・分担」と「連携・協働」の双方が含まれる場合は、まとめて「連携・協働」として表現する”

チーム学校の考え方と地域との連携・協働の課題について、金子（2017）<sup>10</sup>は、地域創生プランとの関連性にも触れながら論じている。幼稚園を含む集団保育施設においても、同様に考えることが可能な面もある一方で、高木（2017）<sup>11</sup>は、教員養成課程の科目「教育相談」の教授内容についてチー



ム学校の考え方に基づき考察しているが、幼稚園教諭養成課程の教授内容には、初等・中等学校の教授内容よりも幼児期の子どもたちや保護者に特化した内容が必要となり、将来の保育現場を見据えた改善が必要となることを指摘している。

従来、保育の施設においては、幼稚園教育要領や保育所保育指針や幼保連携型認定こども園教育・保育要領でも強調されているように、地域の子育て支援の拠点施設としての働きが求められる性質を持つ。また、保育所や児童養護施設等においては、多様な免許や資格をもった人材が連携・分担して働いてきた職場でもある。保健所や児童相談所等との関連諸機関との連携・協動についても、養成校で学ぶ領域でもある。保育者養成校の必修科目である「保育者論」のあるテキスト<sup>12</sup>には、保育所と地域の関連機関とのつながりについて分かりやすく描かれている図が掲載されている。平成29年告示の保育所保育指針や幼保連携型認定こども園教育・保育要領における子育て支援についての記述の中に、子育て支援を行う対象として、在園児の保護者支援のみならず、地域の子育て親やその家庭についても支援していく役割を担うことが明示された。また、幼稚園教育要領については、チーム学校の考え方と同じ連携・協動という文言を使って子育て支援について記述されている。

更に、小学校との連携についてもより記述が深められた。小学校学習指導要領に「幼児期の終わりまでに育ってほしい子どもの姿」という文言が記され、就学前の子どもの姿について認識し教員間での共有を図る必要性が明示されたのは画期的な事である。それぞれの連携課題が以下に引用の通りこれまで以上に連携・協動的に記述されている。

○幼稚園教育要領（平成29年告示）<sup>13</sup>にみる連携課題

“第1章 総則 第3 教育課程の役割と編成等 5 小学校教育との接続に当たっての留意事項

（1）幼稚園においては、幼稚園教育が、小学校以降の生活や学習の基盤の育成につながることに配慮し、幼児期にふさわしい生活を通して、創造

的な思考や主体的な生活態度などの基礎を培うようにするものとする。

（２）幼稚園教育において育まれた資質・能力を踏まえ、小学校教育が円滑に行われるよう、小学校の教師との意見交換や合同の研究の機会などを設け、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を共有するなど連携を図り、幼稚園教育と小学校教育との円滑な接続を図るよう努めるものとする。”

#### ○保育所保育指針（平成29年告示）<sup>14</sup>にみる連携課題

“第２章 保育の内容 ４ 保育の実施に関して留意すべき事項 （２）小学校との連携

ア 保育所においては、保育所保育が、小学校以降の生活や学習の基盤の育成につながることに配慮し、幼児期にふさわしい生活を通じて、創造的な思考や主体的な生活態度などの基礎を培うようにすること。

イ 保育所保育において育まれた資質・能力を踏まえ、小学校教育が円滑に行われるよう、小学校教師との意見交換や合同の研究の機会などを設け、第１章の４の（２）に示す「幼児期の終わりまでに育って欲しい姿」を共有するなど連携を図り、保育所保育と小学校教育との円滑な接続を図るよう努めること。

ウ 子どもに関する情報共有に関して、保育所に入所している子どもの就学に際し、市町村の支援の下に、子どもの育ちを支えるための資料が保育所から小学校へ送付されるようにすること。”

#### ○幼保連携型認定こども園教育・保育要領（平成29年告示）<sup>15</sup>にみる連携課題

“第１章 総則 第２ 教育及び保育の内容並びに子育ての支援等に関する全体的な計画等

##### （５）小学校教育との接続に当たっての留意事項

ア 幼保連携型認定こども園においては、その教育及び保育が、小学校以降の生活や学習の基盤の育成につながることに配慮し、乳幼児期にふさわしい生活を通して、創造的な思考や主体的な生活態度などの基礎を培うよ

うにするものとする。

イ 幼保連携型認定こども園の教育及び保育において育まれた資質・能力を踏まえ、小学校教育が円滑に行われるよう、小学校の教師との意見交換や合同の研究の機会などを設け、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を共有するなど連携を図り、幼保連携型認定こども園における教育及び保育と小学校教育との円滑な接続を図るよう努めるものとする。”

○小学校学習指導要領（平成29年告示）<sup>16</sup>にみる連携課題

“第1章 総則 第2 教育課程の編成 4 学校段階等間の接続（新設）

教育課程の編成に当たっては、次の事項に配慮しながら、学校段階等間の接続を図るものとする。

（1）幼児期の終わりまでに育ってほしい姿を踏まえた指導を工夫することにより、幼稚園教育要領等に基づく幼児期の教育を通して育まれた資質・能力を踏まえて教育活動を実施し、児童が主体的に自己を発揮しながら学びに向かうことが可能となるようにすること。また、低学年における教育全体において、例えば生活科において育成する自立し生活を豊かにしていくための資質・能力が、他教科等の学習においても生かされるようにするなど、教科等間の関連を積極的に図り、幼児期の教育及び中学年以降の教育との円滑な接続が図られるよう工夫すること。特に、小学校入学当初においては、幼児期において自発的な活動としての遊びを通して育まれてきたことが、各教科等における学習に円滑に接続されるよう、生活科を中心に、合科的・関連的な指導や弾力的な時間割の設定など、指導の工夫や指導計画の作成を行うこと。”

尚、チーム保育という言葉は存在するが、この言葉は学校教育におけるチーム・ティーチングと同義であり、チーム学校の考え方とは異なる。チーム保育については、恒川ら（2018）<sup>17</sup>の研究に詳しい。平成28年1月26日に内閣府子ども・子育て本部において開催されている子ども・子育て会議（第27回）、子ども・子育て会議基準検討部会（第30回）合同会議<sup>18</sup>において、チーム保育促進について言及されている。チーム保育体制の整備

は主に人員配置や保育士のキャリアアップ体制の整備による保育の質の向上を図る目的で議論がなされているものである。

### 3. 保育内容「環境」における地域との関わり

これまでにみてきたように、保育分野において、地域との関わりは欠かせない要素である。幼稚園教育要領の第2章ねらい及び内容の「環境」に、内容の（6）として“日常生活の中で、我が国や地域社会における様々な文化や伝統に親しむ”という項目がある。筆者は、保育者養成課程における科目として「保育内容指導法（環境）」を担当するが、その授業において学生自身が地域に出て環境素材を保育教材化する取り組み<sup>19</sup>を行っている。この授業内での取り組みも今年で3年目となる。毎年、学生の発表や製作教材を見ると、筆者自身が新たな発見をする。

白鷗大学の教育学部のある大行寺キャンパスは思川のほとりにあり、川べりの堤は季節により様々な顔を見せる。思川に架かる観覧橋を渡ると小山市の管理する城山公園がある。城山公園は小山城（祇園城）跡に整備されたものである。キャンパスから公園に向かう道中にも豊かな自然がふんだんにあり、発見する動植物などの自然環境との関りは多い。自然物だけではなく、車通りも多い道では多くの標識等も目にする。文字や数、記号等の情報環境との関わりにおいては、学生としての視点と幼児の目の高さから見た世界の違いを発見する学生の姿も見られる。ちょうど授業が行われる時間帯には、近くの小学校の集団下校時に遭遇することも多い。子どもたちは道で会う“知らない人”にも元気よく挨拶する。学生の集団と遭遇すると挨拶を交わす声は尽きない。また、特に幼保コース所属の学生はその学びの性質からか、子どもと言葉を交わすことにほとんど抵抗のない学生が多く、時折、小学生と堤の上などで話し込んでいる学生の姿も見られる。筆者が白鷗大にきたばかりの頃、学生の挨拶が心地良かったことを思い出し、子どもの頃から育まれた気質なのかもしれないと感じることもあった。

公園内は植物や記念碑等のある環境として整備されたエリアや広い空間に東屋が配置されているエリア、子どもが遊ぶ固定遊具が置かれているエリア、併設して広い地面の整備されたエリア等が橋や樹木等によって繋がりを持ちながら分けられている。公園というのはまさに市民の憩いの場ともいえるが、エリアにより出会う人々の層も異なり人的環境との関わり方にも違いが見られる。例えば、東屋にはほぼ毎回といって良いほど、高齢者の方々が談笑している場面が見られた。たいがい高齢者の方々から学生に声をかけてくれる。何の勉強をしているのか？等の質問から始まることが多く、学生が保育士を目指していることなどを答えると孫の通っている保育所の話などに展開する。そういったいわゆる井戸端会議に巻き込まれることも、人的環境との関わりとして吸収してくる学生の姿がある。固定遊具のエリアには、未入園とみられる乳児と保護者の姿をよく目にする。母と子という組もあれば、父母と子の組もある。先述したように学生たちは子どもに話しかけることにほとんど抵抗がないが、親子の場合は異なるようだ。いわゆる“親子水入らず”の光景を見守る（観察する）ことが多いようだ。そのような姿からも、大学での学びを積み重ね、そろそろ保育者という職業人の眼差しが育ってきているように感じることも多い。隣接の広いエリアには、下校して早々に自転車に乗ってやってきてボール遊びを始める小学生の姿が見られ始める。公園でのボール遊び禁止の立て看板により子どもの遊び場消失の問題等や人々の公園に対する価値観の変容が言われて久しいが、ここ小山市ではそのようなことは全くないようで、少し安心させられる。

そのように、地域の中で様々な“ひと・もの・こと”と関わり多角的な眼で環境を捉え素材を見つけてくる学生の学びの姿には、まさにこれからの地方創生＝“まち・ひと・しごと創生”を担う人材としての姿を見ることができる。

## 4. 地域の環境素材を活かした取り組み I

### 4-1. 絵本の町、剣淵町（北海道上川郡）

剣淵町は、北海道上川郡に所在する町である。筆者が初めて剣淵の町を訪れたのは2014年のことである。当時勤務していた大学の教員有志の研修を企画・運営し訪れた時のことである。研修の報告は拙稿「北海道における絵本文化と地域の取り組み」<sup>20</sup>に詳しい。「子どもは地域社会で育てる」とは言うが、剣淵町はまさに地域の人皆が生まれてくる命を思いやり迎えるということを具現化している「君の椅子プロジェクト」を推進しており、筆者は胸を打たれたものだ。またいつか、すぐに訪れたい場所であったがなかなか機会に恵まれず、5年越しの本年5月末にようやく再訪を果たすことができた。再訪した印象は“何も変わっていない”である。しかしそれは、停滞を意味する“何も変わっていない”ではない。ずっと変わらずに、地域力を生かし地域で子どもを、人を、生活を育てているということである。

ここに一編の詩がある。谷川俊太郎の「地球の子ども」<sup>21</sup>である。この詩は既存の詩集等に収蔵されているものではない。『「君の椅子」ものがたり』<sup>22</sup>という冊子の表紙を開けた最初のページに掲載されている詩である。この詩の最後は“椅子もヒトも地球の子ども”という言葉で終わっている。この詩の背景には北海道の森にすくくと林立する木々の写真がある。これらの木から君の椅子が生まれている。なるほど。椅子も地球の子どもである。「君の椅子プロジェクト」は、その街に誕生する子どもを迎える喜びを地域で共有したいという願いを込めて2006年に始まった取り組みである。プロジェクトに賛同する町が町内で生まれる全ての子どもに旭川家具の職人が手作りで作る木の椅子を贈呈している。毎年デザインが変わるその椅子には、生まれた子どもの名前と日付が刻まれ、職人が一つ一つ拵えるそうだが、椅子づくりの木材は全て日本の森で育った広葉樹を使うそうである。子どもは遊びの天才で、椅子が椅子として機能していないこともあるようだ。例えば、転がしたり押して歩いたり、横に倒して人形の揺り

かごにしたり、大好きなミニカーを座面に並べたり、積み木を積んだり、時には、自作の歌を披露するお立ち台になることもあるそうだ。いずれにしても、君の椅子をもらった子どもは、その椅子を色々な形で活用しながら、そこに自分の居場所を見出し主張する姿が見られるとのことである。地域が生まれた子どもを大事に思いプレゼントする椅子は単なる椅子ではなく、“君がいて良い場所”を提供していることに他ならない。地域の環境素材というの特産物等の形あるものを思い浮かべがちだが、本来は人の心の中にある自分の存在価値を地域という広い範囲が認め合うことで、人の営みは成り立ってきたのである。それを思い出させてくれる取り組みがこの「君の椅子」プロジェクトである。

さて、『「君の椅子」ものがたり』に、『もうひとつの「君の椅子」』という章がある。プロジェクトが行われている北海道の町を飛び出していった「君の椅子」がおよそ100脚ある。2011年3月11日の東日本大震災のその当日に出生した子どもたちに送られた「君の椅子」である。居場所の象徴としての「君の椅子」を、被災3県で生まれたはずの生命に送るという発想は、君の椅子プロジェクトを推進してきた町の協働の力=「まちぢから」であるという。震災のあの悲しみの日、本来ならば喜びの日となる子どもの誕生を、人知れず切なさの中で苦しんでいる家族に思いを馳せて、居場所となる椅子を送るもうひとつの「君の椅子」プロジェクトが、震災直後にスタートし2011年の内に形となって『希望の「君の椅子」』と命名され翌2012年の8月までに約100脚が届けられた。『希望の「君の椅子」』を受け取った家族の声が多く紹介されているが、“この子は一度もおめでうと言ってもらえなかった子どもだけれど、今日初めて「おめでう」と言ってもらえた気がする”といったそれらの言葉を読むと胸が締め付けられる思いがする。

地域や町というものを考える時、そこに人の営みがあるということを忘れてはならないと改めて考えさせられた剣淵町への再訪となった。剣淵町を舞台にした映画がある。「じんじん」<sup>23</sup>は、剣淵町の絵本の里としての拠

点施設である剣淵絵本の館も随所に登場する。また、この映画を企画し主演している大地康夫扮する立石銀三郎という大道芸人が、あることをきっかけに絵本を作成するのだが、劇中で使用されている原作ドリアン助川による「クロコダイルとイルカ」<sup>24</sup>は、北海道旭川市在住の絵本作家あべ弘士の生き生きとした動物の絵で描かれ、第23回けんぶち絵本の里大賞を受賞している。

#### 4-2. あべ弘士の描く環境

あべ弘士の「旭山動物園日誌」<sup>25</sup>という作品がある。旭山動物園といえば“行動展示”で有名な旭川市に在する動物園である。絵本作家あべ弘士の原点ともいえる動物園である。というのも、あべ弘士は、もともとこの旭山動物園の飼育員であった。飼育員として関わった様々な動物たちを飼育員ならではの視点で生き生きと描いた作品が、この1冊である。

旭山動物園の名を世に知らしめた“行動展示”は、動物本来の能力や習性を観察することができる展示の方法である。旭山動物園の歴史の中で、廃園の危機にまで瀕した冬の時代と呼ばれた1987年から1996年の間に、現場で働く飼育員たちは、もっと動物たちの生き生きとした姿を伝える方法を考え動物園への思いや夢について話し合いを重ねた。動物たちが生き生きとした姿を見せるためには、動物たち自身が快適に過ごせる環境作りが不可欠だと考え、「14枚のスケッチ」が描かれた。そのスケッチが後に旭山動物園基本計画書として正式に旭川市議会へ提出され、画期的な行動展示として形になり、冬の時代を超えて躍進の時代へと変貌していくのである。その「14枚のスケッチ」を、当時の飼育員であったあべ弘士が描いている<sup>26</sup>。まさに、絵本作家あべ弘士の原点である。そう考えると、あべ弘士の描く動物たちは、その環境を描かれているに等しいと感じられる作品が多くある。

そのようなルーツをもつ絵本作家あべ弘士は、地域に根差した絵本作家ともいえる。「エゾオオカミ物語」<sup>27</sup>では、既に絶滅したエゾオオカミと



人間との関わりの歴史が描かれる。エゾオオカミが生きてきた環境として、前半部には北海道の先住民族であるアイヌの人々との関係性が次のような言葉で表現されている。“オオカミは、大昔からこの大地にすんでいたアイヌの人たちとは、たがいの息づかいをかんじながら、ともに生きてきた”。そこでは、お互いに“こわい”と思いながらも、“尊敬しあっていたのかもしれない”とも綴られている。幼稚園教育要領の領域「環境」の取り扱いの中に、“(3) 身近な事象や動植物に対する感動を伝え合い、共感しあうことなどを通して自分から関わろうとする意欲を育てるとともに、様々な関わり方を通してそれらに対する親しみや畏敬の念、生命を大切にする気持ち、公共心、探求心などが養われるようにすること。”という項目があるが、まさに、このエゾオオカミとアイヌの人々との関係性は畏敬の念を抱きながら共存した生の営みであったのではないだろうか。そして、絵本の後半では、開拓民とエゾオオカミとの物語が描かれる。厳冬の気候変動によりエゾシカの頭数が激減し、それらを主食としていたエゾオオカミは飢え、開拓民の馬を襲い始める。開拓民がエゾオオカミを殺し、やがて絶滅をむかえることとなる。話はここで終わらず、エゾオオカミ絶滅後、天敵のいなくなったエゾシカが増え、今度はそれらが人間の耕す畑などの作物を食い荒らすようになる。人間は、今や、エゾシカを害獣として認識してしまう。この物語を、あべ弘士は北海道の森に住むシマフクロウに語らせている。物語の最後にシマフクロウはこう語る。“でものお、こんどはエゾシカが悪者になっておるが、そうしたのは、ほんとうは“だれ”なんじゃろう?”

旭川には、現在でもコタンと呼ばれるアイヌ民族の生活地区があるそうだ。狩猟生活のための林野等も含めた空間が守られており、いわゆる和人の侵入、介入が許されない地区だそうだ。コタンと和人の地区の境界を大河が流れ、その川岸にあべ弘士は居を構えている<sup>28</sup>。そこで「クマと少年」<sup>29</sup>など、多くのアイヌ民族を描いた作品を世に送り出している。アイヌ民族にとって熊は最高の神とされているそうだ。最高神だからこそ、生きてい

る熊を天の神に返す儀式がアイヌの文化の中に根付く。その熊と生まれた時から兄弟のように育ったアイヌの少年を描いた物語である。それらの物語の中には、「命を大切に」という<sup>・</sup>当<sup>・</sup>た<sup>・</sup>り<sup>・</sup>前<sup>・</sup>のメッセージを超えたあべ弘士のアイヌ民族やその文化、そして動物たちの命に対する畏敬の念が感じられるのである。

本来、人の営みは、そのように動物や自然などの環境の中にあればこそ、生きるものではないだろうか。

## 5. 地域の環境素材を活かした取り組みⅡ

### 5-1. 里山と保育

栃木県の県庁所在地である宇都宮市。その中心部から車で10分も走れば緑の田畑や小さな森や山があるというのが、地方都市の特徴と言える。しかし、放り捨てられたままの自然は、竹や蔦が伸び放題に伸び、やがてそれらは日の光を遮り山の緑が茶色く変わっていく。遠目には奥深い山に見えても近くに行くと緑ではないそれらの自然の景色を見て、人は「美しい」と感嘆の声は上げない。近年はそのような荒れた緑を見ることも少くない。人の営みと自然が共存して美しい緑をなす場所は、里山と言われる。里山とはそもそも、ありのままの自然ではなく、人間が自然と共存し協働し合って生を生き合いながら築かれた風景である。アニメ映画「おもひでぽろぽろ」<sup>30</sup>の中に、田舎の景色とは何かを語る場面がある。一部、抜粋して引用し要約する。“都会の人は森や林や水の流れ等を見て、すぐ自然だと有り難がるが、田舎の景色はみな人間が作ったものである。誰かが植えたとか開いたとか大昔から薪や落ち葉や茸を採っていたとか、それぞれに歴史がある。百姓は絶えず自然からもらい続けなくては生きていけないからこそ、自然にもずっと生きていてもらえるよう、人間が自然と闘ったり自然から色々なものをもらったりしながら、自然と人間の共同作業で出来上がってきた風景が田舎である”。

宇都宮の郊外の長岡という地に、小さな里山がある。ソーシャルファー

ム長岡では、かつて耕作放棄地となっていたこの場所に、様々な立場の人たちと暮らし働きながら里山の力を再建する取り組みをしている。関連法人の社会福祉法人が運営する高齢者福祉施設や保育所を里山内に設けることにより、人の暮らしを里山に呼び戻したのである。また、NAOCという民間団体による「あおぞらきっず」「森のようちえん」といった取り組みで、子どもたちが里山の中で存分に遊ぶ取り組みを定期的に行うことで、人の育ちを根底から支えてもいる。

月に一度、土曜日に「森のようちえん」は未就学児を対象に開催される。豊かな里山の中で子どもたちが自由に自然を体感することにより、この地域の里山の森の保全にも繋がるこの取り組みに賛同する保護者が任意で申し込むものであるが、実際に里山で遊ぶのは子どもたちだけである。季節によって里山の景色は変わり、遊び場所も移動していく。春には「たけのこ蹴り」が行われる。たけのこを掘るのではなく、蹴るのである。未就学の子どもの体体の大きさや力とで、大きく育ったたけのこを掘り出すのは至難の業である。そのため、たけのこの根元を蹴って折り収穫するのだ。筆者もそのような収穫の技を初めて目にした時には驚いたが、子ども達は非常に楽しそうに体当たりで取り組み、帰りには自分の背丈ほどもあろうかという蹴り出したたけのこを迎えにきた家族に自慢気に披露していた。根の張る竹は掘り出すのが正統かもしれないが、子どもたちには子どもたちなりの関わりがあるものだと感心させられる。そして、竹林はその保全のために定期的に伐採され整備されている。子どもたちは、毎回姿を変える竹林の中で切り倒された竹をもうまく使って遊んでいる。夏には湧き水から流れる小川でザリガニを釣るが、その竿は細くしなる竹を拾ってきて利用しているし、子どもの手にも持ちやすい竹は節をくりぬいて望遠鏡にも楽器にもなる。大きなものは基地や橋などの資材となる。自分一人の力では運べない時には大人であるスタッフに命じて運ばせ、自分のイメージをどんどん形にしていく。筆者もだいたい竹運びに駆り出されたものだ。森の中で、子どもたちは王様である。

里山の中には養蜂場もあるが、ミツバチ達が一生懸命働いて集めた蜂蜜を狙ってオオクマバチが出没することがある。ペットボトルで作られた罠を仕掛け、オオクマバチが養蜂場の蜂蜜を横取りしないような工夫がされている。その仕掛けのある小道を子どもたちは平気で通り抜けて、ヤギのモモちゃんの場合へ急ぐ。子どもたちは色々な種類の草を採ってきてモモちゃんに食べさせようとするが、好き嫌いの激しいモモちゃんは、嫌いな草を与えられると角で柵を軽く持ち上げて落とすというやり方で反撃に出る。そんな風にモモちゃんともコミュニケーションを図りながらモモちゃんの好きな草を見分けている子どもたちの姿がある。

子どもたちと里山の中で過ごす、動植物への関わり方などは子どもたちの方がずっと自然で感性をもって自然の声を感じ取っている様に、心打たれる。人間は生まれた時から本能的に自然と共存する術を持っているのだと感じさせられる。その共存への感覚が、里山を活かし環境を保全することに繋がっているのであろう。

## 5-2. サトヤマアカデミーによる森のマーケットながおかの開催

子どもたちの遊ぶこの里山では年に何回か「森のマーケット」が開催される。親子で楽しむ里山時間を提供しているイベントである。自然物を使ったワークショップや里山で収穫された農作物を使った食事の提供などが行われ、親子でゆっくりできるイベントである。公園でもテーマパークでもない里山の中で、様々な自然体験をしながら過ごすことのできるこの取り組みは、長岡の里山を拠点にしているいくつかの団体がサトヤマアカデミーを結成し企画運営しているプロジェクトである。人と自然の繋がりからできる里山循環型生活をテーマに、自然の中での心地良い居場所づくりや、長岡地区の環境保全に寄与している。昨年（2017年）11月に行われた秋の森のマーケットには筆者のゼミナールの学生たちも自然物を使った製作コーナーを企画し出店した。自然物の製作コーナーの他、段ボールで作ったガチャガチャなども好評で、学生たちが徹夜をして景品として用

意した松ぼっくりの飾りはあっという間になくなってしまった。子どもたちだけでなく、保護者の方々からも学生たちの出店は喜ばれた。子どもたちが、かなりの時間を集中して製作やゲームに取り組んでいる間に、ゆっくりと大人だけでフリーマーケットを見たりマッサージを受けたりなどして、さっぱりとすがすがしい顔をしてお迎えに来る保護者の姿が見られた。保育は目の前の子どもたちのためだけではなく、子育て親支援としても機能するという大事な要素を学生たちは実感として学んだようである。

## 6. おわりに

子どもは社会の中で育つという。それはまた、子育てをする親も社会の中で親として育っていくということでもある。倉橋惣三は「育ての心」<sup>31</sup>の中で、赤ん坊の生まれた家では2人の誕生を祝ったという。子の誕生と同時に母が母として誕生した祝いである。またその後の子の成長と同時に母も成長することも語っている。絵本作家の長野ヒデ子は、「おかあさんがおかあさんになった日」<sup>32</sup>に続いて「おとうさんがおとうさんになった日」<sup>33</sup>を描いている。その2冊の中で、母は子を産んだことで母になれたと子に感謝する場面が描かれるが、父親はいつ父親になるのかという疑問を、子どもから投げかけている。父親は子を産むことはないが、お父さんがお父さんになる日というのは“まぶしい”のだそうだ。そのまぶしい日から、父親の成長も始まっていくのであろう。

現在、日本では子育ての孤立化の問題も叫ばれて久しい。「ワンオペ育児」といった言葉も生まれている。社会が、子どもを育て、子育て親を支援したいのはその通りだが、本稿で2つの地域素材を活かした取り組みを紹介した。これは、人を「支える」と大々的に掲げるものでは決してなく、地域の環境を見つめなおすことが結果、社会の中での人の営みを再確認することに繋がった事例である。

今後、都市部も含めて様々な地域の特徴と、子ども・子育てを取り巻く課題を整理しながら、子どもが育つ、子育て親が育つ、そして人が自然と

共生しながら育っていくことのできる方法を探求していくことを続けていきたい。

<注釈及び引用・参考文献>

- 1 栃木県「栃木県県民の日に関する条例」栃木県条例第27号、昭和60年9月30日
- 2 秦建日古監督映画「キスできる餃子」パンフレット、松竹株式会社、2018年6月15日
- 3 宇都宮観光コンベンション協会公式ホームページ
- 4 政府広報／内閣官房「まち・ひと・しごと創生「長期ビジョン」」「総合戦略」基本方針2018」
- 5 小山市私立保育園協議会会長 齋藤好子（社会福祉法人豊心会すみれ保育園園長）談話、取材担当 山路千華、2018年4月24日
- 6 音田忠男、金田利子『「遊びを通じた保育」の理解と実践－遊び観との関わりから－』保育の研究No.25, 45-51, 2013年
- 7 音田忠男、金田利子「保育者の子ども時代の遊び環境と遊び観」、保育の研究No.27, 78-82, 2015年
- 8 中央教育審議会『チームとしての学校の在り方と今後の改善方策について』文部科学省、平成27年12月21日
- 9 中央教育審議会『チームとしての学校の在り方と今後の改善方策について』文部科学省、平成27年12月21日、p.11、注釈12より引用
- 10 金子晃之『「チーム学校」と地域との連携・協働の課題について』桜花学園大学保育学部研究紀要 第15号、2017
- 11 高木悠哉『保育者・教員養成課程に求められる科目「教育相談」に関する現状と課題』人間教育 1（3）、奈良学園大学人間教育学部、2018
- 12 井上孝之・山崎敦子編集「子どもと共に育ちあうエピソード保育者論」株式会社みらい、2016年2月10日 p.77 図5-3 この図は、テキスト執筆者が全国保育協議会ホームページ資料をもとに作成したものである。
- 13 文部科学省「幼稚園教育要領（平成29年告示）」より引用
- 14 厚生労働省「保育所保育指針（平成29年告示）」より引用
- 15 内閣府・文部科学省・厚生労働省「幼保連携型認定こども園教育・保育要領（平成29年告示）」より引用
- 16 文部科学省「小学校学習指導要領（平成29年告示）」より引用
- 17 恒川丹・小原敏郎「保育領域におけるチーム保育の研究動向」共立女子大学家政学部紀要 第64号、2018
- 18 内閣府子ども・子育て本部「子ども・子育て会議（第27回）、子ども・子育て会議基準検討部会（第30回）合同会議議事録」平成28年1月26日
- 19 山路千華『保育内容指導法「環境」の授業における実践的取り組み』白鷗大学教育学部論集第10巻第2号、2016
- 20 山路千華・汐見和恵・川村祥子・尾崎博美「北海道における絵本文化と地域の取り組み―旭川市と剣淵町（上川郡）の視察研修を通して―」新渡戸文化短期大学子ども教育研究所紀要第10号、2015
- 21 谷川俊太郎「地球の子ども」、「君の椅子」ものがたり』p.2~3、2014年

- 22 監修：「君の椅子」プロジェクト『「君の椅子」ものがたり—北海道の小さな町から生まれたいのちのプロジェクト』文化出版局、2014
- 23 山田大樹監督映画「じんじん」、「じんじん」全国配給委員会、2013
- 24 文：ドリアン助川・絵：あべ弘士「クロコダイルとイルカ」『じんじん』製作委員会、2013
- 25 あべ弘士「旭山動物園日誌」出版工房ミル、1981
- 26 旭川市旭山動物園「旭川市旭山動物園開園50周年記念誌」旭川振興公社、2017
- 27 あべ弘士「エゾオオカミ物語」講談社、2008
- 28 あべ弘士談話、第21回 絵本学会大会（札幌大谷大学短期大学部）ラウンドテーブル  
C「ようこそ、自然へ！絵本画家が語る実体験としての自然」より、2018年6月3日
- 29 あべ弘士「クマと少年」ブロンズ新社、2018
- 30 高畑勲監督映画「おもひでぼろぼろ」東宝、1991
- 31 倉橋惣三「育ての心」（倉橋惣三文庫③津守真・森上史郎編）より「母の誕生・母の成長」フレーベル館、2008
- 32 長野ヒデ子「おかあさんがおかあさんになった日」童心社、1993
- 33 長野ヒデ子「おとうさんがおとうさんになった日」童心社、2002

